

令和2年度

経済学部

社会人入試

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
2. この問題冊子は、全部で5ページ、解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚である。試験開始の合図があってから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
3. 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。氏名を書いてはいけない。
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。解答は、解答用紙の所定欄に記入しなさい。
解答用紙の所定欄以外に記入した解答は、評価（採点）の対象としない。
5. 配布された問題冊子および下書き用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

令和2年度富山大学推薦入試・社会人入試

問題訂正

○11月27日(水)

小論文 9時30分試験開始 経済学部「昼間主コース」「夜間主コース」

解答用紙「2枚中の1枚目」の〔設問2〕

(正)「資本主義という経済システム」

(誤)「資本主義の原理」

【問題1】 次の文章を読んで、[設問1] から [設問4] に答えなさい。解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

スミス(注1)が考える貧困のない生活とは、単に生命の維持に必要な、最低限の物資が確保されている生活ではない。「あの人は人並みの生活をしていないのではないかと、他人からいぶかし気な目線で見られたり、人としての自負と尊厳を保てないような境遇に置かれていれば、かりに生活物資は満たされていたとしても、それはむしろ、貧困な生活なのである。人間は、人間であるという一事だけで、自らを①尊厳ある存在として主張することができる。それが、自由・平等とともに、およそ近代社会が満たさなくてはならない、最低限の条件であったはずだ。

そもそも近代社会とは、誰もが、自らを尊厳ある主体として主張できる社会のことを言うものだろう。そのためには、それぞれの人々が、自分で自分の生活を自立させる権利を、身分に関わりなく、等しく認められることが必要である。近代社会が市場社会をその根底に求めた第一の理由はここにあった。自分が自分であること、それは、自分が他人に受け入れられていると思えてはじめて、そう感じられることであって、そのとき人は自分を自分と思い、自分を自由と思い、他者と比べて平等だと実感する。これを一言で表現したものが、それが「尊厳」という、いささかいかめしい言葉なのである。それは必需品と同じように、保たれているあいだはそれと意識することはないが、いざ失ってみると、たちどころにその喪失を思い知り、慄然とさせられるものだろう。だから、人が尊厳を保てない社会があったら、それもまた、スミスの意味では、貧困な社会ということになるだろう。

自分が他人に支配され、他人の恣意に従わされているとき、人はけっして自分の尊厳を確信しない。慣れてしまえば苦痛も感じなくなるのかもしれないが、他人の恣意に従わされている限り、人はかならず何かの拍子に、自身の尊厳の欠如を思い出す。だから、人が人を支配することをやめ、対等の者どうしだが、それぞれの役割を果たすことで社会の秩序を維持していく。それが、近代市場社会の大原則になった。

ところが、その市場社会を実際に担ったのは、資本主義経済という一つの経済システムだった。そこでは、資本家と労働者という、あたかも身分のような人間関係が再現されていた。それは、経済学においては、はじめから社会的な関係として語られることが多いけれども、じっさいに、人々が身分のようなものを感じることは、多くの場合働く現場、つまりは「企業」においてであろう。確かに、従業員が経営者に従う関係は、労働協約等によって法的に(つまり近代的に)定められたことのはずではあるものの、その真の効力が、契約よりも根深い情緒的なもの、あるいは慣習的なもの、場合によっては道徳的とされるものによって支えられているとしたら、その起源はおそらく、近代以前から存在する何かにある。資本主義は近代市場経済の原理として、それじたいは近代的な現象として語られるのが普通だけれども、資本主義を担う企業には、どこか前近代を彷彿とさせる光景が、美意識の裏づけとともに残されていると感じられることがある。もし企業という存在が、はじめから、その隅々に至るまで近代的な契約関係として作られていたとしたら、果たして、資本主義経済は、あるいは産業経済は機能したのだろうか。

②市場社会の原則と資本主義という経済システムとのあいだには、微妙な差異があるということ。このことに、わたしたちはもう少し、敏感になる必要があるのではないだろうか。そして、スミスの時代とはじつは、市場社会が社会のほぼ全域にまで浸透しながらも、資本主義経済には微妙に成り切っていない、きわめて稀少な時期に属するのである。資本家と労働者への階級分裂はまだ完成しておらず、そのどちらの階級に進むかを、あたかも自分で選択できるかのような表現が、『国富論』(注2)ではあちらこちらに出てくる。『国富論』を読むときには、この微妙なタイミング(のズレ)にぜひとも留意

する必要があるのである。

ただ、いくら「自分は尊厳ある存在だ！」と主張してみても、それを他人が認めないのでは、それは尊厳にならない。自己の尊厳とは、他人がその尊厳を承認してはじめて尊厳としての意味を持つのであり、家族にせよ職場の同僚にせよ、自分の周囲の人々に、自分という人間が一個の人格を持つ存在として、その人格のまま受け入れられているという実感が無い限り、つまりは、自分の尊厳が承認されているという実感が無い限り、人は自分を「尊厳ある存在」として自覚することはできないだろう。

③尊厳は、自身の精神的基盤でありながら、それが成立するためには、他者という存在が不可欠である。他者がまずいて、その他者との関係性が先に存在していない限り、個人の尊厳は成立しないのである。そして尊厳の自覚を欠いたまま、人が自己の主体性を自覚することは、おそらく不可能である。ここに、経済学的主体像の一つの虚構がある。経済学では、他者の存在を前提せずに、あるいは、他者の存在を知る前から、先に「私的個人 (private individual)」としての自覚が成立するものと想定する。そして、その「私的個人」の意思によって、他者との関係が後から作られていくのである。経済学は、時代を問わず、学派を問わず、この個人像だけは共有してきた。だから、経済学における「個人」には、尊厳を失うことへの恐怖がない。というより、およそ尊厳というものへの（特に、それが失われることがあるのだということへの）関心がない。ここに、他者からの「承認」を繰り返し得ることを通じて、はじめて「個人」が析出されてくると説くスミスとの、大きな違いがある。

さて、④スミスは、こうした自己の尊厳を守るためにも、すなわち、他者からさげすみの目線を受けないようにするためにも、人並みの必需品と便益品を持つことが必要だと考える。互いに互いの尊厳を守ろうとする意思は、所有物の多寡によって左右されるべきものではないけれども、人並みの物質生活を送っているように見えることが、他者からの目線を気にせず済むようになるための、もっとも効果的な防壁になることも確かである。だから、物的な意味でも、精神的な意味でも、誰もが人並みの必需品と便益品を持てるようにすることが先決であり、そのためには、それらが全員に行き渡るだけの生産量と、全員に行き渡らせる分配の仕方が必要になる。この二つの役割を果たすもの、それがあの「分業」なのである。

出典：井上義朗『いま読む！名著 「新しい働き方」の経済学 アダム・スミス『国富論』を読み直す』（現代書館、2017年）26-30頁（問題作成において、文章や語句などを一部省略・修正した。）

注1：イギリスの古典派経済学者。『国富論』の著者。

注2：『諸国民の富の本質と原因に関する一考察』(An inquiry into the Nature and Cause of the Wealth of the Nations)。1776年出版にされ、経済学の原点とされる。

〔設問1〕下線部①に関して、「尊厳」について著者が説明している最も適当な文の最初と最後の5字を抜き出さない。

〔設問2〕下線部②に関して、「市場社会の原則」と「資本主義という経済システム」とはどのようなものか。「微妙な差異」が明らかになるようにそれぞれ60字以内で説明しなさい。

〔設問3〕下線部③に関して、尊厳の成立にはなぜ他者が不可欠なのか。50字以内で文中から抜き出さなさい。

〔設問4〕下線部④に関して、スミスは「必需品」として最小限の食べ物や最低限の着る物といったような、それがなければすぐに死んでしまうような、生命維持レベルの物資のことだけを考えていたのではない。それを持っていないと、「まともな人間」として他人から見てもらえなくなりそうな、あるいは人並みの人に思われなくなりそうな、そういう物品と（その物品を持っているという事実によって証明される）暮らしぶりのことも含めて、「必需品」と表現した。現代におけるこうした「必需品」としてはどのようなものが考えられるか。例を挙げてその理由を200字以内で説明しなさい。

【問題2】次の文章を読んで、[設問1]から[設問3]に答えなさい。解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

ダンシングクラブというシーフードレストランがある。日本では、2014年10月に新宿に一号店がオープンし、現在2店舗が展開されている(注)。このレストランの特徴は「料理を手づかみで食べる」ということだ。テーブルに敷かれた白い紙の上にシーフードを中心とした料理がそのまま置かれ、それらを客が手づかみで食べる。デザートなどの一部を除くほとんどのメニューがこの方式で食べられる。最初はお皿で提供していたサラダも、客が勝手に手で食べ始めたために手づかみ方式に変わったという。

レストランなどの飲食店の評価や満足度に味覚や嗅覚が影響することはもちろんだが、それ以外の視覚、聴覚、触覚の影響も無視できない。上で述べたシーフードレストランでは、手づかみで食べることによる触覚からの情報によって、料理の温度、硬さや柔らかさ、そして質感などをより鮮明に感じることが可能となり、そのことが①そのレストランにおける顧客の経験価値を高めているのだと理解できる。

昨今マーケティングの世界では、消費者の五感に訴えることを主眼とする、感覚マーケティング(sensory marketing)の有効性に関する認識が高まっている。この領域で数多くの研究を行っているミシガン大学のクリシュナは、感覚マーケティングを「消費者の感覚に訴えることによって、彼らの知覚、判断、そして行動に影響を与えるマーケティング」と定義している。

もちろん、これまでもマーケティングの世界で感覚訴求の重要性が軽視されていたというわけではない。食品や飲料の味や香水の香りなど、製品のコアとなる機能に係る要素はもちろん、製品やパッケージのデザインなどの視覚要素の重要性についても広く認識され、さまざまな努力が行われてきた。

近年では、視覚と味覚など異なる感覚間の相互作用や、物理的感覚の心理的評価への影響などに関する新たな知見が蓄積されてきており、そのことが感覚マーケティングに対する注目を高めている一因となっている。このことを冒頭のレストランの事例に戻って確認しよう。先述したシーフードレストランにおける、②料理に手で触れることのポジティブな影響には、異なる道筋があると考えられる。その第一は手で触れることそのものが楽しい、心地良いという直接的効果、第二は触覚が味覚上の美味しさを引き上げるといった効果である。

一番目の効果は、手づかみで料理を食べるといった、あまり日常的ではない行為そのものが価値の向上につながるということだ。この価値には、料理を手で触れたりつかんだりすることの、楽しさや心地良さといった要素も含まれるだろう。二つ目の効果として考えられるのは、触覚情報が味覚上の美味しさの感覚に影響することだ。このような、複数の異なる感覚間の相互作用は、多感覚統合ないしは多感覚相互作用などと呼ばれる。多感覚相互作用という効果は、視覚が味覚に影響するというように、ある感覚が他の別の感覚に影響するという現象である。このような作用については、さまざまな領域において経験的に知られており、多くの研究でその効果が検証されてきた。③シーフードレストランの事例においては、手を触れることによって得られる料理の温度や質感などの感触が味覚に影響し、通常の方法で食べる場合に比してより美味しく感じるという効果が生じているのではないかと考えられる。

出典：守口剛「五感に訴える「感覚マーケティング」の効果 消費者行動から考えるマーケティング【最終回】」『Harvard Business Review』2015年9月1日号(問題作成において、文章・見出しなどを一部修正・加筆・削除した。)

注：2015年時点。2019年現在では、東京、大阪、福岡の3店舗が展開されている。

〔設問1〕下線部①は具体的にどのようなものか、文中の言葉を用いて50字以内で説明しなさい。

〔設問2〕下線部②は具体的にどのようなものか、文中の言葉を用いて150字以内で説明しなさい。

〔設問3〕下線部③に関して、シーフードレストランの事例とは反対に、通常は手づかみで食べられる食品に対して、手づかみで食べない方法を提案した事例がある。

スナック菓子を製造・販売している某メーカーが発売したポテトチップスの商品ラインナップの中に、ポテトチップスを手でつかんで食べるのではなく、箸で食べる『箸食べ』という方法を推奨したものがある。この方法が推奨された商品は、一枚でも満足感が得られるような味の濃さが特徴であり、シーズニングパウダーの濃度が濃い（出典：カルビー株式会社「スナックはこうでなければ！ガツンと濃い味で満たされたい～！シーズニングの濃度最高レベル?!箸食べ専用商品!『ポテトチップス 極濃(ごくのう) サワークリーム味』新発売」ニュースリリース, 2017年12月6日)。

この事例において、食品に手を触れないということは、経験価値にどのような影響を及ぼすと考えられるか。筆者が指摘している「料理に手で触れるポジティブな影響」に鑑みたくえで、あなたの考えを350字以内で述べなさい。

下書き用紙

見本

下書き用紙

見本